

鹿踊りのはじまり

宮沢賢治

青空文庫

そのとき西のきらぎらのちぢれた雲のあいだから、夕陽は赤くななめに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のようにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いていた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の方や、野原に行われていた鹿踊りの、ほんとうの精神を語りました。

そこらがまだまるつきり、丈高い草や黒い林のままだったとき、嘉十はおじいさんとたちと北上川の東から移ってきて、小さな畑を開いて、粟や稗をつくっていました。

あるとき嘉十は、栗の木から落ちて、少し左の膝を悪くしました。そんなときみんなはいつでも、西の山の中の湯の湧くところへ行つて、小屋をかけて泊つて療すのでした。

天気の良い日に、嘉十も出かけて行きました。糧と味噌と鍋とをしょって、もう銀いろの穂を出したすすきの野原をすこしびっこをひきながら、ゆっくりゆっくり歩いて行つたのです。

いくつもの小流れや石原を越えて、山脈のかたちも大きくはつきりなり、山の木も一本一本、すぎごけのように見わけられるところまで来たときは、太陽はもうよほど西に外れて、十本ばかりの青いはんのきの木立の上に、少し青ざめてきらきら光ってかかりました。

嘉十は芝草しばくさの上に、せなかの荷物をどっかりおろして、栃とちと粟あわとのだんごを出して喰たべはじめました。すすきは幾いくむらも幾いくむらも、はては野原いっぱいのように、まっ白に光って波をたてました。嘉十はだんごをたべながら、すすきの中から黒くまつすぐに立っている、はんのきの幹をじつにりっぱだとおもいました。

ところがあんまり一生けん命あるいたあとは、どうもなんだかお腹なかがいっぱいのような気がするのです。そこで嘉十も、おしまいに栃の団子をとちの実のくらい残しました。

「こいづば鹿しかさ呉けでやべか。それ、鹿、来て喰け」と嘉十はひとりごとのように言つて、それをうめばちそうの白い花の下に置きました。それから荷物をまたしよつて、ゆつくりゆつくり歩きだしました。

ところが少し行つたとき、嘉十はさっきのやすんだところに、手拭てぬぐいを忘れて来たのに気がつきましたので、急いでまた引つ返しました。あのはんのきの黒い木立がじき近くに見えていて、そこまで戻もどるぐらい、なんの事でもないようでした。

けれども嘉十はびたりとたちどまってしまいました。

それはたしかに鹿のけはいがしたのです。

鹿が少くても五六疋びき、湿しめっぽいはずらをずうっと延ばして、しずかに歩いているらし

いのでした。

嘉十はすすきに触れないように気を付けながら、爪立てをして、そつと苔を踏んでそちの方へ行きました。

たしかに鹿はさっきの柝の団子にやってきたのでした。

「はあ、鹿等あ、すぐに来たもな。」と嘉十は咽喉の中で、笑いながらつぶやきました。そしてからだをかがめて、そろりそろりと、そちに近よって行きました。

一むらのすすきの陰から、嘉十はちよつと顔をだして、びっくりしてまたひつ込めしました。六足ばかりの鹿が、さっきの芝原を、ぐるぐるぐるぐる環になつて廻っているのです。嘉十はすすきの隙間から、息をこらしてのぞきました。

太陽が、ちようど一本のはんのきの頂にかかつていましたので、その梢はあやしく青くひかり、まるで鹿の群を見おろしてじつと立っている青いききものようにおもわれました。すすきの穂も、一本ずつ銀いろにかがやき、鹿の毛並がことにその日はりっぱでした。嘉十はよろこんで、そつと片膝についてそれに見とれました。

鹿は大きな環をつくつて、ぐるくるぐるくる廻っていました、よく見るとどの鹿も環のまんなかの方に気がとられているようでした。その証拠には、頭も耳も眼もみんなそ

つちへ向いて、おまけにたびたび、いかにも引っぱられるように、よろよろと二足三足、環からはなれてそっちへ寄って行きそうにするのでした。

もちろん、その環のまんなかには、さっきの嘉十の柝の団子がひとかけ置いてあったのでしたが、鹿どものしきりに気にかけているのは決して団子ではなくて、そのとなりの草の上にくの字になって落ちている、嘉十の白い手拭らしいのでした。嘉十は痛い足をそつと手で曲げて、苔の上にきちんと座すわりました。

鹿のめぐりはだんだんゆるやかになり、みんなは交かわる交がわる、前肢まえあしを一本環の中の方へ出して、今にもかけ出して行きそうにしては、びっくりしたようにまた引つ込めて、とつとつとつしずかに走るのでした。その足音は気もちよく野原の黒土の底の方までびびきました。それから鹿どもはまわるのをやめてみんな手拭のこちらの方に来て立ちました。嘉十はにわかに耳がきいんと鳴りました。そしてがたがたふるえました。鹿どもの風にゆれる草穂くさほのような気もちが、波になつて伝わつて来たのでした。

嘉十はほんとうにじぶんの耳を疑いました。それは鹿のことばがきこえてきたからです。

「じゃ、おれ行つて見で来こべが。」

「うんにや、危ないじゃ。も少し見でべ。」

こんなことばもきこえました。

「何時だかの狐みだいに口発破などき罹つてあ、つまらないもな、高で柵の団子などだよ。」

「そだそだ、全ぐだ。」

こんなことばも聞きました。

「生きものだかも知れないじやい。」

「うん。生きものらしどごもあるな。」

こんなことばも聞きました。そのうちにとうとう一疋が、いかにも決心したらしく、せなかをまつすぐにして環からはなれて、まんなかの方に進み出しました。

みんなは停つてそれを見えています。

進んで行つた鹿は、首をあらんかぎり延ばし、四本の脚を引きしめ引きしめそろりそろりと手拭に近づいて行きましたが、俄かにひどく飛びあがつて、一目散に遁げ戻ってきました。廻りの五疋も一ぺんにぱつと四方へちかけようとしたが、はじめの鹿が、ぴたりととまりましたのでやつと安心して、のそのそ戻つてその鹿の前に集まりました。

「なじよだた。なにだた、あの白い長いやづあ。」

「縦に皺しわの寄ったもんだけあな。」

「そだら生きものだないがべ、やっぱり蕈きのこなどだべが。毒蕈ぶすきのこだべ。」

「うんにや。きのごだない。やっぱり生きものらし。」

「そうが。生きもので皺うんと寄つてらば、年とし老りだな。」

「うん年老りの番兵だ。ううはははは。」

「ふふふ青白の番兵だ。」

「ううははは、青じろ番兵だ。」

「こんどおれ行つて見べが。」

「行つてみる、大丈夫だいじょうぶだ。」

「喰くつつがないが。」

「うんにや、大丈夫だ。」

そこでまた一疋が、そろりそろりと進んで行きました。五疋はこちらで、ことりことりとあたまを振ふつてそれを見ていました。

進んで行つた一疋は、たびたびもうこわくて、たまらないいうように、四本の脚を集めてせなかを円まるくしたりそつとまたのばしたりして、そろりそろりと進みました。

そしてとうとう手拭のひと足こつちまで行って、あらんかぎり首を延ばしてふんふん嗅いでいましたが、俄かにはねあがつて遁げてきました。みんなもびくつとして一ぺんに遁げだそうとしましたが、その一ぴきがびたりと停まりましたのでやつと安心して五つの頭をその一つの頭に集めました。

「なじよだた、なして逃げで来た。」

「囁じるべとしたようだたもさ。」

「ぜんたいなにだけあ。」

「わがらないな。とにかく白どそれがら青ど、両方のぶちだ。」

「匂あなじよだ、匂あ。」

「柳の葉みだいな匂だな。」

「はでな、息吐でるが、息。」

「さあ、そでば、気付けないがた。」

「こんどあ、おれあ行つて見べが。」

「行つてみる」

三番目の鹿がまたそろりそろりと進みました。そのときちよつと風が吹いて手拭がちら

つと動きましたので、その進んで行つた鹿はびっくりして立ちどまってしまい、こつちのみんなもびくつとしました。けれども鹿はやつとまた氣を落ちつけたらしく、またそろりそろりと進んで、とうとう手拭まで鼻さきを延ばした。

こつちでは五足がみんなことりことりとお互^{たがい}にうなずき合つて居^おりました。そのとき俄かに進んで行つた鹿が竿立^{さおだち}ちになつて躍^{おど}りあがつて遁^はげてきました。

「何^なして遁^はげてきた。」

「氣味悪^{きびわり}くなてよ。」

「息吐^{いぎつ}でるが。」

「さあ、息^{いぎ}の音^{おと}あ為^さないがけあな。口^{くち}も無いようだけあな。」

「あだまあるが。」

「あだまもゆぐわがらないがつたな。」

「そだらこんだおれ行つて見べが。」

四番目の鹿が出て行きました。これもやつぱりびくびくものです。それでもすっかり手拭の前まで行つて、いかにも思い切つたらしく、ちよつと鼻を手拭に押^おしつけて、それから急いで引つ込めて、一目さんに歸つてきました。

「おう、柔^やつけもんだぞ。」

「泥^{どろ}のようにな。」

「うんにや。」

「草のようにな。」

「うんにや。」

「ごまざいの毛のようにな。」

「うん、あれよりあ、もう少し硬^{こわ}ばしな。」

「なにだべ。」

「とにかく生きもんだ。」

「やつぱりそうだが。」

「うん、汗^{あせ}臭^{くさ}いも。」

「おれも」^{ひとがえり}「遍^{へん}行^{ぎょう}つてみべが。」

五番目の鹿がまたそろりそろりと進んで行きました。この鹿はよほどおどけものようでした。手拭の上にすっかり頭をさげて、それからいかにも不審^{ふしん}だというように、頭をかくつと動かししましたので、こつちの五足がはねあがって笑いました。

向うの一疋はそこで得意になって、舌を出して手拭を一つべろりと嘗なめましたが、にわかに怖こわくなつたとみえて、大きく口をあけて舌をぶらさげて、まるで風のように飛んで帰つてきました。みんなもひどく愕おどろきました。

「じゃ、じゃ、噛かじらえだが、痛いたぐしたが。」

「プルルルルル。」

「舌ね拔ぬがれだが。」

「プルルルルル。」

「なにした、なにした。なにした。じゃ。」

「ふう、ああ、舌ちぢ縮ぢまつてしまったたよ。」

「なじよな味だた。」

「味無いがたな。」

「生きもんだべが。」

「なじよだが判わからない。こんどあ汝うなあ行いつてみる。」

「お。」

おしまいの一疋がまたそろそろ出て行きました。みんながおもしろそうに、ことごと頭

を振つて見ていますと、進んで行つた一疋は、しばらく首をさげて手拭を嗅いでいました
が、もう心配もなにもないという風で、いきなりそれをくわえて戻つてきました。そこで
鹿はみなびよんびよん跳びあがりました。

「おう、うまい、うまい、そいづさい取つてしめば、あどは何つても怖つかなぐない。」

「きつともて、こいづあ大きな 蝸牛の早からびだのだな。」

「さあ、いいが、おれ歌うだうはなんてみんな廻れ。」

その鹿はみんなのなかにはいつてうたいだし、みんなはぐるぐるぐるぐる手拭をまわり
はじめました。

「のはらのまん中の めつけもの

すつこんすつこの 栃だんご

栃のだんごは 結構だが

となりにいからだ ふんながす

青じろ番兵は 気にかがる。

青じろ番兵は ふんにやふにや

吠えるもささいば 泣ぐもささい

瘠^やせで長くて

ぶちぶちで

どこが口^{くち}だが

あだまだが

ひでりあがりの

なめぐじら。」

走りながら廻りながら踊^{おど}りながら、鹿^{しか}はたびたび風のように進んで、手拭を角でついた

り足でふんだりしました。嘉^か十^{じゅう}の手拭はかあいそうに泥がついてところどころ穴^{あな}さえあきました。

そこで鹿のめぐりはだんだんゆるやかになりました。

「おう、こんだ団子^{だんご}お食^くばがりだじよ。」

「おう、煮^にだ団子^{だんご}だじよ。」

「おう、まん円^{まる}けじよ。」

「おう、はんぐはぐ。」

「おう、すつこんすつこ。」

「おう、けつこ。」

鹿はそれからみんなばらばらになって、四方から柵のだんごを囲んで集まりました。

そしていちばんはじめに手拭に進んだ鹿から、一口ずつ団子^{だんご}をたべました。六^む疋^{びき}めの鹿

は、やつと豆粒まめつぶのくらいをたべただけです。

鹿はそれからまた環わになって、ぐるぐるぐるぐるめぐりあるきました。

嘉十はもうあんまりよく鹿を見ましたので、じぶんまでが鹿のような気がして、いまにもとび出そうとしましたが、じぶんの大きな手がすぐ眼めにはいりましたので、やつぱりだめだとおもいながらまた息をこらしました。

太陽はこのとき、ちょうどはんのきの梢こすえの中ほどにかかって、少し黄いろにかがやいて居おりました。鹿のめぐりはまただんだんゆるやかになって、たがいにせわしくうなずき合いい、やがて一列に太陽に向いて、それを拝むようにしてまっすぐに立ったのです。嘉十はもうほんとうに夢ゆめのようにそれに見とれていたのです。

一ばん右はじにたった鹿が細い声でうたいました。

「はんの木ぎの

みどりみじんの葉もじの向さ

じやらんじやらんの

お日さん懸かがる。」

その水すい晶しょうの笛ふえのような声に、嘉十は目をつぶってふるえあがりました。右から二ば

ん目の鹿が、俄かにとびあがって、それからからだを波のようにうねらせながら、みんなの間を縫^ぬってはせまわり、たびたび太陽の方にあたまをさげました。それからじぶんのところに戻るやびたりととまってうたいました。

「お日さんを

せながさしよえば　はんの木^ぎも

くだけで光る

鉄のかんがみ。」

はあと嘉十もこっちでその立派な太陽とはんのきを拝みました。右から三ばん目の鹿は首をせわしくあげたり下げたりしてうたいました。

「お日さんは

はんの木^ぎの向^もき、降りでも

すすぎ、ぎんがぎが

まぶしまんぶし。」

ほんとうにすすきはみんな、まっ白な火のように燃えたのです。

「ぎんがぎがの

すすぎの中ながさ立ちあがる

はんの木ぎのすねの

長ながんがい、かげぼうし。」

五番目の鹿がひくく首を垂れて、もうつぶやくようにうたいだしていました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底そこの日暮ひぐれかだ

苔こけの野はらを

蟻ありも行がず。」

このとき鹿はみな首を垂れていましたが、六番目がにわかには首をりんとあげてうたいました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底そこでそっこりと

咲ぐうめばちの

愛えどしおえどし。」

鹿はそれからみんな、みじかく笛のように鳴いてはねあがり、はげしくはげしくまわり

ました。

北から冷たい風が来て、ひゅうと鳴り、はんの木はほんとうに砕けた鉄の鏡のようにか
がやき、かちんかちんと葉と葉がすれあつて音をたてたようにさえおもわれ、すすきの穂
までが鹿にまじつて一しよにぐるぐるめぐつてるように見えました。

嘉十はもうまったくじぶんと鹿とのちがいを忘れて、

「ホウ、やれ、やれい。」と叫びながらすすきのかげから飛び出しました。

鹿はおどろいて一度に竿のように立ちあがり、それからはやてに吹かれた木の葉のよう
に、からだを斜めに^{みな}して逃げ出しました。銀のすすきの波をわけ、かがやく夕陽の流^{ゆう}れを
みだしてはるかに^にはるかに遁^にげて行き、そのとおったあとのすすきは静かな湖の水脈^{みお}のよ
うにいつまでもぎらぎら光つて居りました。

そこで嘉十はちよつとにが笑いをしながら、泥のついて穴のあいた手拭^{てぬぐい}をひろつてじ
ぶんもまた西の方へ歩きはじめたのです。

それから、そうそう、苔^{こけ}の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすすきとおった秋
の風から聞いたのです。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鹿踊りのはじまり

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>